

西谷3号墓1/10復元模型の 製作について

須賀照隆

1. はじめに

2010年（平成22）4月29日，出雲市大津町に出雲弥生の森博物館がオープンした。この館の展示の中心的役割を担う展示物として設置されたのが，「西谷3号墓1/10復元模型」（以下「模型」と呼ぶ，PL.4）である。

この模型は1800年余り前に行われた西谷3号墓における王の埋葬の様子を復元したもので，当時の大型四隅突出型墳丘墓の姿のみならず，王の埋葬儀式を行う人々，儀式に集まった人々，儀式を支えた人々など，そこに存在した「ヒト」の姿まで精密に再現している。

本報告では，模型製作にあたって重ねた検討の経緯と結果を記述し，復元の根拠を明らかにしておきたい。

2. 西谷3号墓の概要

西谷3号墓は，出雲市大津町所在の国史跡「西谷墳墓群」にある。弥生時代後期の大型四隅突出型墳丘墓である。1983年から1992年にかけて島根大学考古学研究室を中心とする調査団によって綿密な調査が実施されており，墳丘の規模と構造，主体部の構造及び副葬品，祭祀に使用された大量の土器，壮大な墓上施設の存在などが明らかにされた（渡邊1992・1993）。

調査の所見では，墳丘主部の規模は約40m×約30m，高さ約4.5mと復元された。墳丘斜面には全面に貼石が施され，裾周りにも二重の敷石・列石構造がめぐっていた。

墳頂部の平坦面には少なくとも大小8つの土壙が確認されたが，中心的位置を占めるのは第1主体と第4主体と名付けられた2つの大型土壙で，これが東西に並列して掘り込まれている。

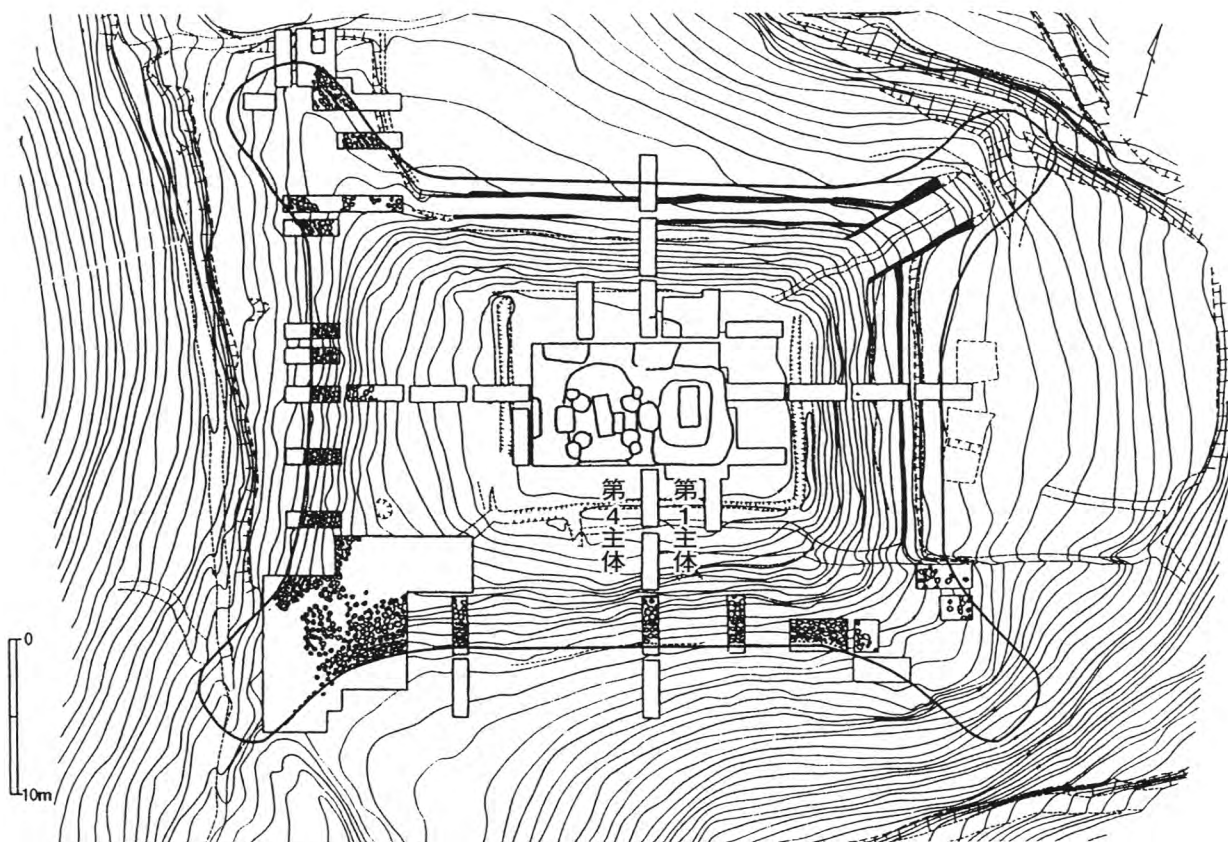


図1 西谷3号墓全体図（S=1/500） ※渡邊1993一部改変

中央のやや東よりに位置する第1主体では、2段掘りの土壙（ $6.1 \times 4.5 \times$ 深さ 1 m^1 ）内に棺槨二重構造の施設（木槨 $2.6 \times 1.2 \text{ m}$ 、木棺 $2.1 \times 0.8 \text{ m}$ ）が1つ埋置されていた。棺内一面には朱が敷かれ、ガラス小玉をはじめ多数の玉類が副葬されていた。土壙埋土の上の盛土上面には、棺上に相当する位置に朱の付着した拳大の円礫1つが置かれ、それを中心に約100個体の土器が集積されていた。

第1主体の西に並び、ほぼ中央に位置する第4主体では、すり鉢状の土壙（ $6 \times 4.5 \times$ 深さ 1.4 m ）内の中央最深部に大型の棺槨二重構造の施設（木棺 $2.1 \times 0.8 \text{ m}$ 前後）があり、さらにその東のやや高いレベルにも小型の棺槨（木棺 $0.95 \times 0.5 \text{ m}$ ）が埋置されていた。どちらも棺内一面に朱が敷かれていた。大型木棺には鉄剣1とガラス管玉20が副葬され、小型木棺に副葬品は認められなかった。土壙埋土の上の盛土上面には、大型木棺上に相当する位置に朱の付着した円礫1つ、小型木棺上に相当する位置に朱の付着しない円礫1つ、合計2つの円礫が置かれていた。大型木棺上の円礫周辺には小礫群があり、このあたりを中心とする直径4mほどの範囲に200個体以上の土器が集積されていた。これらの土器は、弥生後期の在地の土器（的場式）の他に、吉備地方から搬入された特殊壺・特殊器台の類（立坂型）、丹後方面などに類例のある一群の土

器が含まれている。西谷墳墓群における大型四隅突出型墳丘墓の中では最も古い時期を示しており、第1主体、第4主体上の土器群は同一土器型式の時期のものである。

第4主体上では、土壙を埋めた後に改めて柱穴を掘って4本の柱を立てていたことも確認された。その後、若干の埋土を加えた後で各柱のすぐ外側に柱側に傾けた小さな柱を立て、さらに土壙外にまで広がる盛土を加えている。確認された円礫と大量の土器を使用した祭祀痕は全てこの盛土上で確認されたものであった。柱穴の土層から、柱はこの祭祀後比較的短期間の内に腐食もしくは撤去されたものと推定される。柱上部の構造は不明だが、祭儀の間だけ一時的に設置された特別な施設であった可能性が指摘されている。

なお、第1主体ではこのような痕跡は一切なかったが、土壙を埋めた後に土壙外にまで広がる盛土を加え、その盛土上で円礫と大量の土器を使用した祭祀を行う点は共通する。第1主体、第4主体埋土上の盛土の前後関係は不明であり、同時期に一体的に施された可能性もある²。

3. 模型制作の考え方

1) 基本コンセプト

「西谷3号墓 1/10復元模型」を制作するにあ

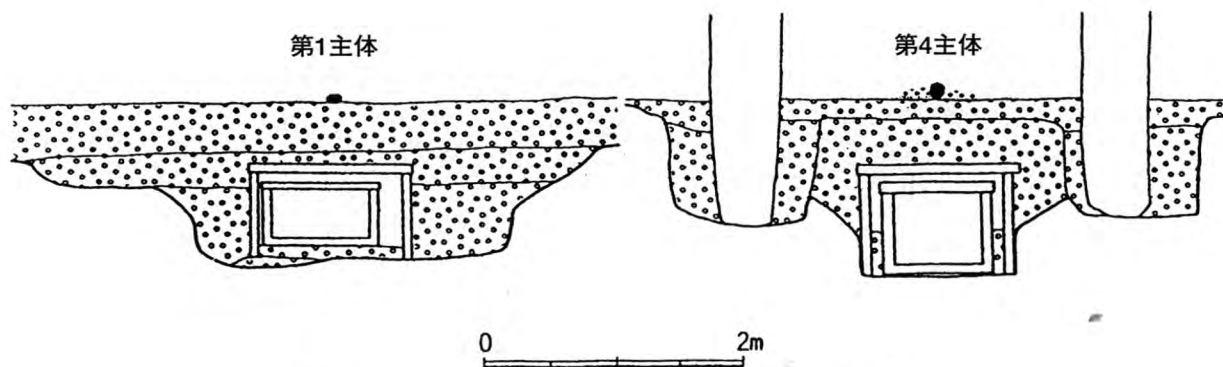


図2 主体部復元模式図（ $S=1/60$ ） ※渡邊2011より転載

たって、私たちが目指した基本的なコンセプトは次のようなものである。

- ・西谷墳墓群に葬られた「王」の存在を印象づけるものとする。
- ・人々の動きが見えるシーン設定を行う。
- ・考古学的な研究成果を基本にすえる。
- ・『魏志』倭人伝を初めとした歴史資料に記載された習俗を尊重する。
- ・可能な限り多くの情報が伝わるものとする。
- ・リアリティーを追求し、証明困難な細部の設定・造作についても学術的な知見や人間の行動パターンに矛盾のない範囲で造りこむ。

こうした基本コンセプトに基づき、王や墳墓の姿はもちろんのこと、そこに存在したであろう人物一人一人の姿・行動・持ち物まで詳細に作り込むことにした。

これによって、見れば見るほど新しい発見がある、魅力にあふれた模型の製作を目指した。

2) 基本的な場面設定

西谷3号墓の発掘調査では、墓の構造と形状、埋葬構造、副葬品、祭祀の様子など、様々な情

報が得られている。これらの情報をより多く視覚的に伝えるため、学術的な知見や人間の行動パターンに矛盾のない範囲で、可能な限り多くの動作が同時併行で行われたものと仮定して表現することとした。

まず、本模型で示すべき最も重要な情報として、①第4主体上の巨大な4本柱の様子、②第1主体もしくは第4主体の棺の様子、③各地からの参列者の様子、④造墓の様子、などが挙げられた。これを実現するためには、第4主体で棺が埋納された後に立てられた4本柱を見せる必要がある。このため、必然的に第1主体で棺を露出させることとなる。

①について想定される場面として採用したのが、第4主体の棺が埋められた後に4本の主柱を立てつつある場面である。

②について想定される場面として採用したのが、第4主体の棺が埋められた後、続いて第1主体の棺を納める儀式をしている場面である³。

③については、この段階では各地の土器を使

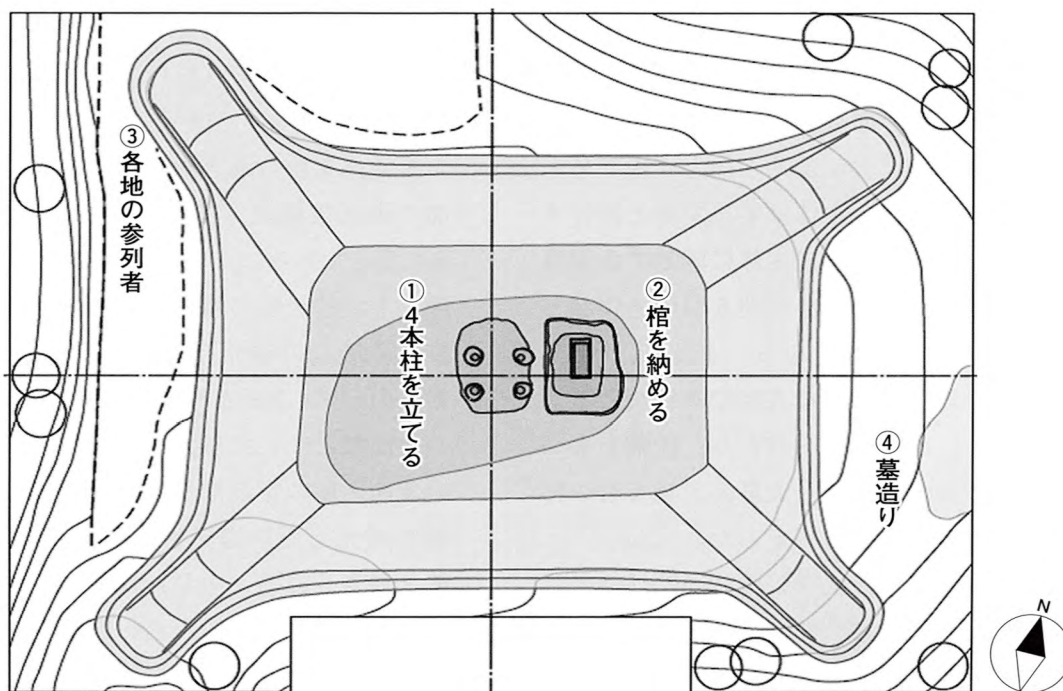


図3 模型の場面設定配置図

用した（人々が集まった）墓上での祭祀は始まっていないと考えられるため、墓上での祭祀に参加するために墳裾周辺へ各地からの参列者が集まりつつある場面を採用した。

④については、この段階では墳丘はほぼ完成していたと考え、第1主体土壙埋土のための土運びをしている場面を採用した。ただし、貼石の一部も貼り残すことによって、その後の造墓作業も示唆することとした。

以上の場面が実際に同時並行したか否かは証明することが出来ないが、少なくともこれを否定する考古学的な証拠は現状で存在しない。より多くの情報を伝えるという観点から、こうした場面設定を採用することとした。

3) 被葬者像の設定

模型の世界におけるストーリー性をより具体的にするため、第4主体と第1主体被葬者の人物像を設定した。

西谷3号墓は墳墓規模、副葬品、盛大な墓上儀式の痕跡などから、当地において隔絶した立場にあった人物を埋葬した墓であることは疑いのないところであり、中心となる被葬者を「出雲王」と呼称することに支障はないであろう。

墳丘のほぼ中央に位置するとともに、4本柱が立てられた唯一の埋葬施設である第4主体の被葬者こそが「出雲王」と呼ぶべき人物であったと考えられる。第1主体は第4主体と併行する位置に造られ、かつ第4主体に匹敵する規模をもつ埋葬施設であり、その他6つの主体部とは隔絶した規模と内容である。よって、「出雲王」に準じた地位にあった人物であったと考えられる。また、副葬品の内容から、鉄剣をもつ第4主体の被葬者は男性、大量の玉類をもつ第1主体の被葬者は女性と想定した。

男女として仮定した場合に両者の関係性として考えられた案が、婚姻関係の男女、実質的に政治を行った男性と鬼道（呪術）でクニを治めた女性、という2つの設定である。本模型にお

いては、『魏志』倭人伝の記載内容により近いという理由から、後者の案を採用することとした。

模型の世界では、第4主体の男性を「男王」、第1主体の女性を「女王」と呼称し、男女二人の王がクニを治めていたと想定する。

4. 墳墓の復元

1) 墳丘の復元

従来から想定されている墳丘規模は、主墳規模約40m×約30m、高さ約4.5m、突出部を含めた推定規模については短辺が40m以上、長辺が約50～55mとなっている（渡邊1992・1993・坂本ほか2006・出雲市文化財課2006）。模型制作にあたって発掘調査の各部数値を再精査し、一定の基準に基づいた仮定数値をもとに墳丘設計図を製作した（図4）。

主墳部については、南辺と西辺裾残存部の墳丘傾斜角度、現状の墳頂平坦面傾斜変換点、推定基盤地形のレベルを基準として復元規模を決定した。なお、墳丘裾まわりの二重の敷石・列石構造については、調査で確認できた部分は調査値を踏襲し、それ以外は幅1m強、高さ0.25m程度に統一して復元することとした。以上の復元作業から導き出された模型における主墳部の復元規模は、長辺39m、短辺28.5m、最大高4.5mである。ただし、模型のシーンは土壙埋土上の盛土前の時間軸であるため、実際に作成する墳丘の復元高は土壙埋土上の盛土高⁴を差し引いて4.3mとした。

突出部については、まず比較的遺存状態の良い北西・南西突出部を調査から想定される最小値で復元した。復元された2つの突出部には幅・長さ共に差が生じたため、より大きな北西突出部を墓上へ登るための特別な突出部と仮定し、より小さな南西突出部を残った突出部復元の参考として採用することとした。参考とした

数値は突出部幅と平坦面斜距離である。

以上の推計から導き出された西谷3号墓の突出部を含めた全体規模は、長辺51.5m、短辺42.5mである。なお、この復元規模は仮定を重ねた模型制作上の規模であり、従来の想定規模を否定するものではない。実際の墳丘規模については凡そ以下のような誤差範囲が想定される。

主墳最大高：4.5m 前後

主墳規模：長辺37～42m 前後×短辺26～31m

全体規模：長辺50～55m 前後、短辺42m 前後

その他、配石構造については、発掘調査において確認された墳丘斜面の貼石及び裾まわりの二重の敷石・列石構造に基づいて欠損部も再現した。墓上へ登るための特別な突出部と仮定した北西突出部については、安来市宮山Ⅳ号墓(松本ほか2003)などを参考に、突出部先端に大きな石を並べた通路状構造(ステッピングストーン、渡邊2003)を想定した。

また、南東突出部平坦面については、設定シーン以後に想定される墳頂部での棺埋設作業や盛土作業等の効率性を勘案し、作業用通路として石を貼り残した。墳頂部作業終了後に当該部分の貼石を仕上げる想定である。

2) 墳頂部施設の復元

模型の場面設定において想定した墳頂部の施設は、発掘調査で確認されたものとして、男王の棺埋納後の土壌、男王埋葬上の主柱及び主柱穴、女王埋葬の土壌及び棺槨が挙げられる。

男王の埋葬については、平面規模約6m×約4.5mの土壌埋土を掘削する形で直径110～125cm、深さ60～90cmの主柱穴が4つ掘り込まれ、ここに直径30～40cmの柱が垂直に立てられていた。

柱の長さについては明らかでないが、5.5mの柱を想定し、これを柱穴へ落とし込むためのスロープ状盛土施設も設置することとした。

女王の埋葬施設は、平面規模が約6.1m×約4.5m、深さ約1mの2段掘り土壌の底に棺槨二重構造(木棺2.1×0.8m、木槨2.6×1.2m)を設置するものである。

復元する場面としては、棺が見え、かつ棺槨二重構造が理解できる瞬間を想定し、槨の蓋を閉めつつある場面を選択することとした。この時点では墓壙の2段目の掘り込みは埋められ、棺の蓋も閉められていたことが想定される。

また、柱立てのような土木作業と、おごそか

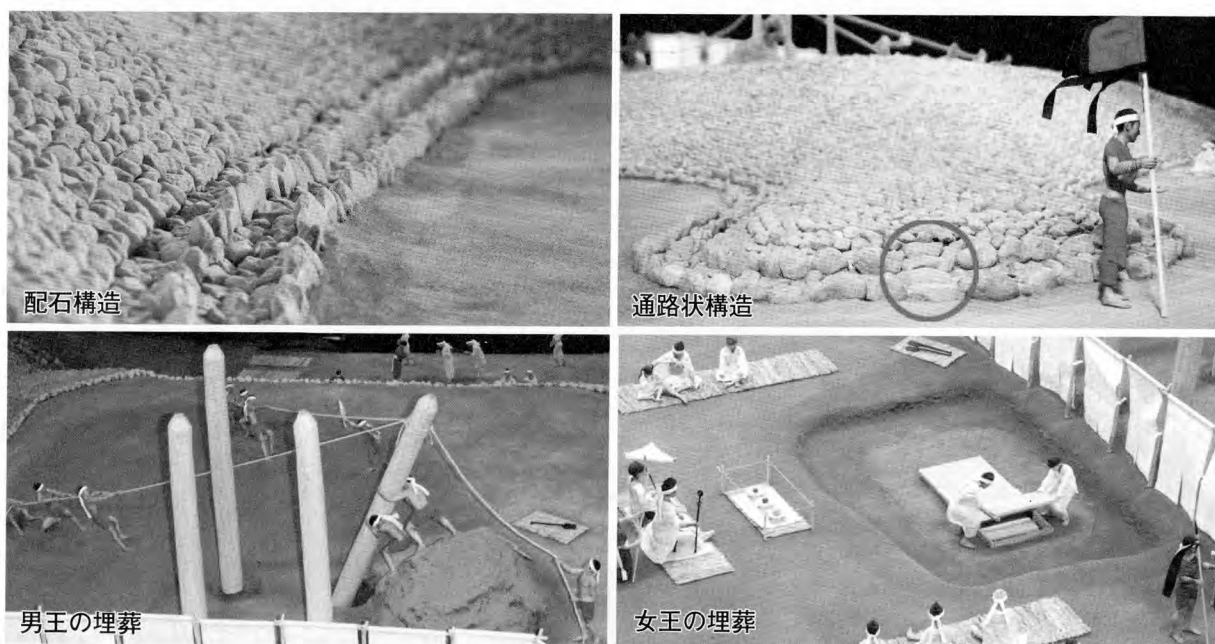


図5 復元された墳丘構造と墳頂部施設

であるべき棺を埋納する儀式が同時並行で行われることになるため、両場面の間に簡易的な目隠し状施設を想定した。遺構としてはこのような施設が確認されていないので、遺構には残らない程度の細い杭を打ち込み、これに骨組みを縛り付ける簡易的な施設とした。

3) 墳裾周辺施設の復元

墳裾周辺部においては、発掘調査で確認された施設は存在しない。後世に破壊された地形もあり、なんらかの施設が存在した可能性も否定できないが、裳屋等の特別な施設は設置せず、参列者の集合場所周辺に若干の平坦な盛土地形を、東側テラスに仕上げの貼石作業のための石材集積地を想定するのみに留めた。

5. 人物群の復元

1) 登場人物の設定

模型上には、基本的な場面設定において想定した四つの人物群、つまり、墓上で棺を納めつつある人物群、墓上で柱を立てつつある人物群、墳裾部周辺へ各地から集合しつつある人物群、墓壇埋土のための土運びをする人物群などを配置した(PL.5)。

墓上で棺を納めつつある人物群については、儀式をとりしきる新たな男王・女王、そこに参加する親族や彼らに奉仕する人物たちが存在したと考えられる。後者の役職としては、王の付き人、儀式の場を守る兵士のほか、儀式を演出する音楽を奏でる人物などを想定した。

墓上で柱を立てつつある人物群は、作業の指揮者と実際に作業を行う人物からなると考えた。この作業は儀式の一環として行われる重要なものと考え、参加する人物群は一般の民衆ではなく、皆一定の地位をもった人物であったと想定した。

墳裾部周辺へ各地から集合しつつある人物群については、各地からの来客を迎え入れる役割

の人物と発掘調査で確認された山陰・吉備・北陸系土器の故地である山陰の参列者、吉備の参列者、北陸の参列者などが存在したと考えられる。各参列者群には、出身地(クニ)の代表として高い身分の人物が派遣されたと想定した。

墓壇を埋め戻すための土運びをする人物群については、作業の指揮者と作業する人物が存在したと考えた。これらの人物群はその後の墳頂部盛土や貼石の仕上げなどを短時間に行うと想定すると、相当人数の動員が必要であったと考えられる。作業指揮者は一定の地位にあった人物であろうが、作業員はムラから動員された一般民衆と想定した。

その他、四方の突出部には兵士が立ち番をしたものとし、墳頂部の兵士たちとともに王の棺を運ぶ葬列の護衛を兼ねていたと想定した。

2) 登場人物の髪形

人物を表現した弥生時代の立体造形物の内、表現が写実的な西日本⁵⁾の土製品を分類すると、頭の正面形が三角形、扇形、丸形のものが確認される。それらの資料から復元できる髪形とその復元根拠については以下のとおりである(深澤・佐古2009)。

三角形の頭部について見ると、香川県鴨部川田遺跡例などに確認される顔面装飾が『魏志』倭人伝に男性がしていたと明記される「鯨面」である公算が大きい。髪結び表現のないものが主流である⁶⁾ことから、現代のソフトモヒカンのような髪形であったと想定した。同様の頭部表現は県内でも松江市西川津遺跡出土人面付土器(図6-1)にも確認される。

扇形の頭部について見ると、東日本においては基本的に女性像として表現されている。西日本例においては「鯨面」表現をしたものは一例もない。このことから、この髪形は女性を表現したものと考えられよう。大阪府目垣遺跡出土例(図6-2)などで確認される細かな刻目表現とその盛り上げ方を根拠に、髪の毛を左右に

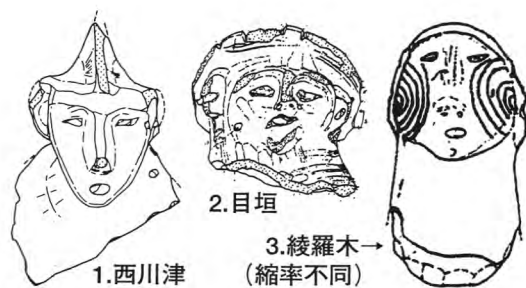


図6 弥生人の頭部表現※各報告書・報告資料より転載

お下げ状に編み、これを左右から頭頂へと折り返して扇形に整えたものと想定した。

丸形の頭部について見ると、山口県綾羅木郷台地遺跡例（図6-3）などのように、「鯨面」が表現された資料が数多く認められる。このことから、これも男性の頭部を表現したと考え、五分刈りや剃髪 of 髪形を想定した。

考古学的には以上3種の髪形が想定されるが、その他の髪形も存在したであろう。髪を結わない伸ばしたままの髪形や、紐で簡単に束ねただけの髪形など、一定の階層以下の人物には更なるバリエーションを想定した。

3) 登場人物の衣服

『魏志』倭人伝には、衣服について「男子は皆露紵し、木屨を以て頭に招け、その衣は横幅、ただ結束して相列ね、ほぼ縫うことなし。婦人は被髪屈紵し、衣を作ること単被の如く、その中央を穿ち、頭を貫きてこれを衣る。」とある⁷⁾。

この記述から読み取れる男性衣服の解釈については諸説あり、大きくは『梁職貢図巻』（6世紀）に描かれた倭国使の図に準じた形態であるとする井筒雅風氏らの説（図7、井筒1986、深澤・佐古2009ほか）と、貫頭衣のバリエーションであるとする武田佐知子氏らの説（猪熊1964、武田1984ほか）に大別される。ここでは前者を採用し、男性の衣服は長い布を腰と肩に巻きつける形態と想定した。また、男性が頭に「招け」た布については、鉢巻状のものを想定した。

女性の衣服を貫頭衣とすることについては、

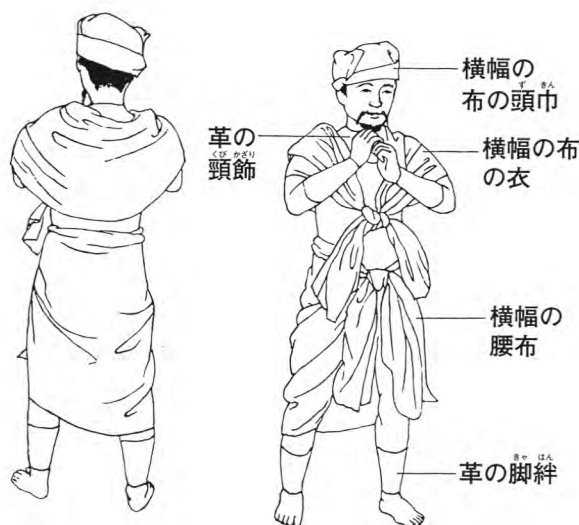


図7 井筒雅風氏復元の男性衣服

ほぼ異論のないところであろう。貫頭衣の細部形態にも諸説あるが（猪熊1964、武田1984ほか）、頭が通る部分を残して2枚の長い布を並べて綴り合せ、それを半分に折った形態を採用した。ただし、佐原真氏らも指摘しているように（佐原2003）、弥生人骨の腕部に付着した布の遺存例（福岡県吉ヶ浦遺跡）や、縦糸方向に直交した縫い合わせの痕跡の資料（佐賀県吉野ヶ里遺跡）などから、貫頭衣に袖部を縫製した衣服も存在した可能性が高い。よって、女性衣服のバリエーションとして袖付の衣服も加えることとした。

なお、衣服に使用された布は麻・絹を想定し、幅30cm程度の布を綴り合せたもの（角山幸洋1981）とした。絹織物については多彩な染色が可能であった（吉岡・深澤2009）と考え、色彩にもバリエーションを想定した。

4) 登場人物のイレズミ・化粧

『魏志』倭人伝には、「男子は大小となく、皆黥面文身す」「朱丹を以てその身体に塗る、中国の粉を用うるが如きなり」とある。つまり、倭人は顔や体にイレズミや赤い化粧をしていたと解釈できよう。特にイレズミについては男性の習俗として記述されている。

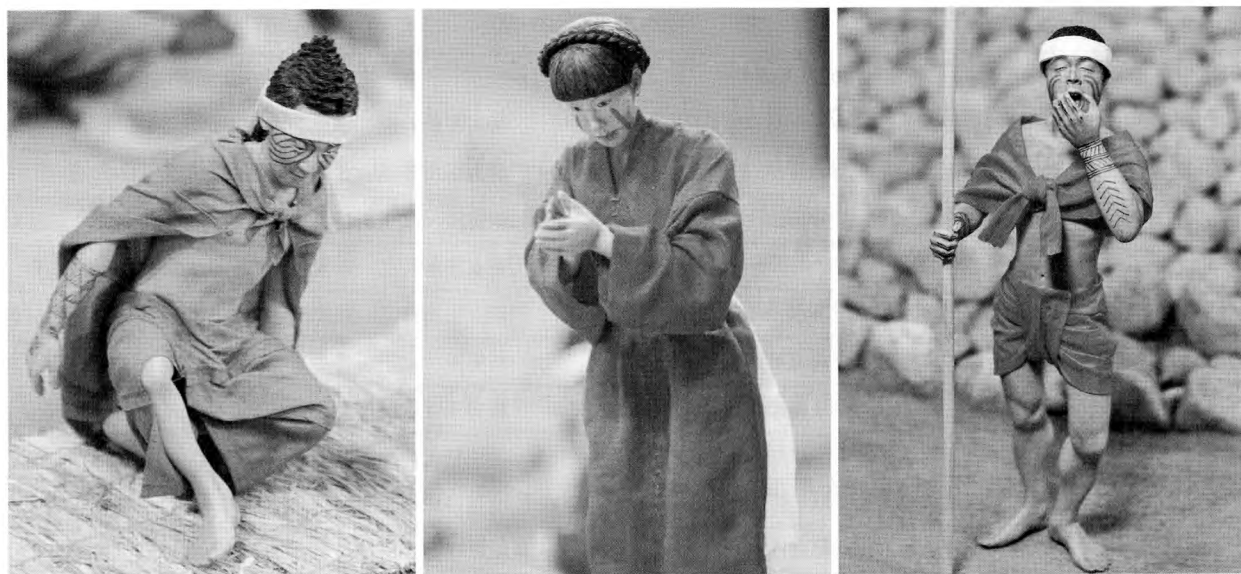


図8 復元された弥生人の姿

弥生時代後期における顔のイレズミについては、瀬戸内地方と東海地方を中心に共通パターンをもった鯨面表現が絵画土器などに見られ、地域を越えた最も一般的なイレズミパターンとして注目されている（設楽1999）。

吉備地域でも一倉遺跡例など複数の資料で同様の鯨面表現が確認されており（設楽1999）、吉備出身の男性にはこれらの資料に準じたイレズミが施されていると想定した（図8左）。

山陰地方では加茂岩倉遺跡出土銅鐸絵画（角田ほか編2002）等の資料が存在する。ただし、山陰の例は弥生時代中期に限られ、資料の生産地も確定されていない。一倉遺跡等の表現とも異なる。山陰の人物については不明な点が多いものの、当該期には顔のイレズミ習俗が廃れ、高齢男性にのみ簡易なイレズミが施されているものと想定した。

北陸地方にも当該期の良好な資料が存在しないが、糞置遺跡の人面付土器（弥生中期，久田2006）、矢田野エジリ古墳の人物埴輪（古墳後期，小松市教育委員会1992）に見られる顔の線刻⁸をイレズミとして捉え、この形態に準じたイレズミと吉備地域同様のイレズミとが混在したスタイルのものが施されているものと想定した。

以上のように、山陰地方、北陸地方における顔のイレズミについては、はなはだ根拠薄弱な復元とならざるを得なかった。さらに、体のイレズミ表現と赤い化粧表現については当該期の参考資料が皆無に等しく、弥生土器等に刻まれた文様や記号状の表現、古墳時代の人物埴輪の化粧表現、民俗例のイレズミ表現などを恣意的に選択して復元することとした⁹。赤い化粧については、当該期にイレズミの習俗が薄れたと想定した、各地の女性や山陰地方の男性を中心に表現している。根拠薄弱な点が誤解を招く可能性も指摘されたが、弥生世界のリアリティーを演出するためにはこれらの復元が必要不可欠であるとの考えのもと、上記のイレズミ・化粧表現を行うこととした。

6. 器財等の復元

その他、模型内には数多くの器財等が存在するが、これらについては紙面の都合上、全体的な復元方針の概要を記すにとどめ、個々についての詳細な復元根拠は略した。個別の参考資料等¹⁰については表1の一覧を以って報告にかえさせていただきたい。

表 1 主な復元器財一覧

No.	器財名	復元参考資料等	備 考
1	木製儀杖	山持遺跡, 下長遺跡出土品ほか	新男王所持品 赤黒漆塗にアレンジ
2	鉄剣	西谷 3 号墓, 青谷上寺地遺跡, 瓜生堂遺跡出土品ほか	新男王所持品 3 号墓同等品を想定
3	胸飾り	西谷 3 号墓, 西谷 2 号墓出土品	新男王・女王所持品 3 号墓同等品を想定
4	腕輪	西谷 2 号墓出土品	新女王所持品 新女王・男王を 2 号墓被葬者と想定
5	木製団扇	姫原西遺跡, 比恵遺跡出土品ほか	新女王所持品 比恵遺跡調の赤黒漆塗にアレンジ
6	木製腰掛	山持遺跡, 青谷上寺地遺跡出土品ほか	新男王・女王所持品 黒漆塗にアレンジ
7	蓋	天神遺跡, 青谷上寺地遺跡出土品, 形象埴輪資料ほか	新男王従者所持品
8	木製琴	青谷上寺地遺跡出土品ほか	墳頂祭祀従事者所持品
9	木製琴板	姫原西遺跡出土品	墳頂祭祀従事者所持品
10	木製楯	青谷上寺地遺跡出土品ほか	墳頂部衛兵所持品
11	鉄矛	上田原遺跡, 二塚山遺跡出土品, 『常陸国風土記』逸文ほか	衛兵所持品 柄に帯状にはためく布をアレンジ
12	木製短甲	伊場遺跡, 雀居遺跡出土品ほか	墳頂部衛兵所持品 装飾省略
13	羽根飾り	清水風遺跡出土絵画ほか	墳頂部衛兵所持品 ヤマドリの羽根想定
14	旗 1	東殿塚古墳出土絵画, 『洛神賦図』, 『常陸国風土記』逸文	新男王・女王背後の衛兵所持品 葬列先頭の人物と想定
15	旗 2	『洛神賦図』, 『常陸国風土記』逸文ほか	北西突出部衛兵所持品 葬列最後尾の人物と想定
16	旗 3	諏訪大社御柱祭祀祀具ほか	土木作業指揮者所持品
17	山陰土器	西谷 3 号墓出土品	山陰の参列者所持品
18	吉備土器	西谷 3 号墓出土品	吉備の参列者所持品
19	北陸系土器	西谷 3 号墓出土品	北陸の参列者所持品
20	木製容器	天神遺跡, 姫原西遺跡, 青谷上寺地遺跡出土品ほか	来客接待用酒器として合子, 碗を想定
21	モッコ	『松崎天神縁起』『当麻曼荼羅縁起』ほか	作業員所持品 土・石の運搬具
22	籠	青谷上寺地遺跡出土品, 民俗資料ほか	作業員所持品 土・石の運搬具
23	木製鋤	姫原西遺跡出土品ほか	一部は儀式用として黒漆塗を想定
24	石杵	西谷 3 号墓出土品	墳頂最終盛土後に墓壇上設置される石 3 個
25	木製台	姫原西遺跡出土品ほか	石杵を置く台として想定

復元器財は発掘調査で確認されたものだけでなく、先に設定した登場人物とその動きなどから想定されるものも選定した。

基本的に王の所持品の一部と祭祀に使用された土器, および石杵等については, 西谷 2・3 号墓出土品を, その他の器財については山陰地方の遺跡出土品を優先して参考資料としたが, これらだけでは不足する情報については, 全国各地の遺跡出土品, 国内外の文献資料, 絵画資

料, 民俗資料等も必要に応じて参考とした。

7. まとめ

模型製作にあたっての検討は多岐にわたり, これまでに述べてきた項目以外にも模型場面前後の詳細なストーリー設定, 人物一体一体の詳細設定, 動植物の設定, これらの設定に伴う配置・動き・表情など, それこそ多種多様な検討

を重ねた。本稿で記述できなかったこれらの点については、別の機会に述べてみたいと思う。

遺跡の復元模型制作は、限られた断片的な情報を繋ぎ合わせ、更にそこに生じた空白を矛盾なく埋めていくことによって実現される。1/10という大スケールで遺跡を復元し、しかもそこに存在した人々の姿まで再現するためには、膨大な情報の空白を埋めなければならない。

それは、私たちにとって困難を極めた仕事であった。関係する地域の発掘調査だけでは知れない情報については、他の遺跡の資料を、更に不足する情報については、民俗資料や『魏志』倭人伝をはじめとする歴史資料など、あらゆる情報の収集を試みた。もちろん、全ての復元に十分な根拠を揃えることは不可能であり、想像に頼る部分も多々あったが、少なくとも収集した情報に矛盾しない合理的なイメージのみを選択したつもりである。

こうした過程を経て作成された模型は、単なる弥生墳丘墓祭祀の再現に留まらず、現状で考えられる弥生世界の習俗をかなり忠実に再現することができたと考えている。

この模型を通して、私たちが考える「出雲王」と弥生墳丘墓での祭祀、そして弥生時代のイメージをより多くの方々に伝えることができれば幸いである。

最後に、本模型の製作は、作業にご協力いただいた皆様はもちろんのこと、西谷3号墓の発掘調査をされた島根大学考古学研究室の皆様をはじめ、多くの先人達の調査研究成果なしには実現し得なかったものである。記して感謝の意を表したい。

付記 模型制作の経緯

最後に、模型制作経過の概略を以下に記しておく。

出雲弥生の森博物館建設計画の具体化に向けて2005年（平成17）10月に「出雲弥生の森博物館整備・活用検討委員会」が設置された。2007年（平成19）5月からは委員会内に展示専門部会を設けて2008年（平成20）11月まで延べ8回の詳細な展示方針検討を行った。この間に展示実施設計業務及び展示修正設計業務を（株）丹青社に委託し、展示専門部会の意見を反映した展示設計書を作成した。この展示設計の中核的な展示製作物として位置づけられたものが、西谷3号墓1/10模型である。

2009年（平成21）1月に（株）丹青社と展示工事契約を締結した後は、設計細部のディテールを検討・確認するために渡邊・花谷・三原・須賀・高橋を中心としたメンバーによる検討会議を重ねた上で、施工図作成を行った。

その後模型の各パーツが神奈川の模型製作業者で工場制作され、出雲弥生の森博物館に持ち込まれた後に最終仕上げが行われた。この間渡邊、須賀による工場検収作業を実施している

出雲弥生の森博物館には2010年（平成22）1月に模型パーツが搬入され、設置、仕上げ作業、検索装置設置、検索ソフトインストール等を経て同年3月30日に引渡しを受けた。

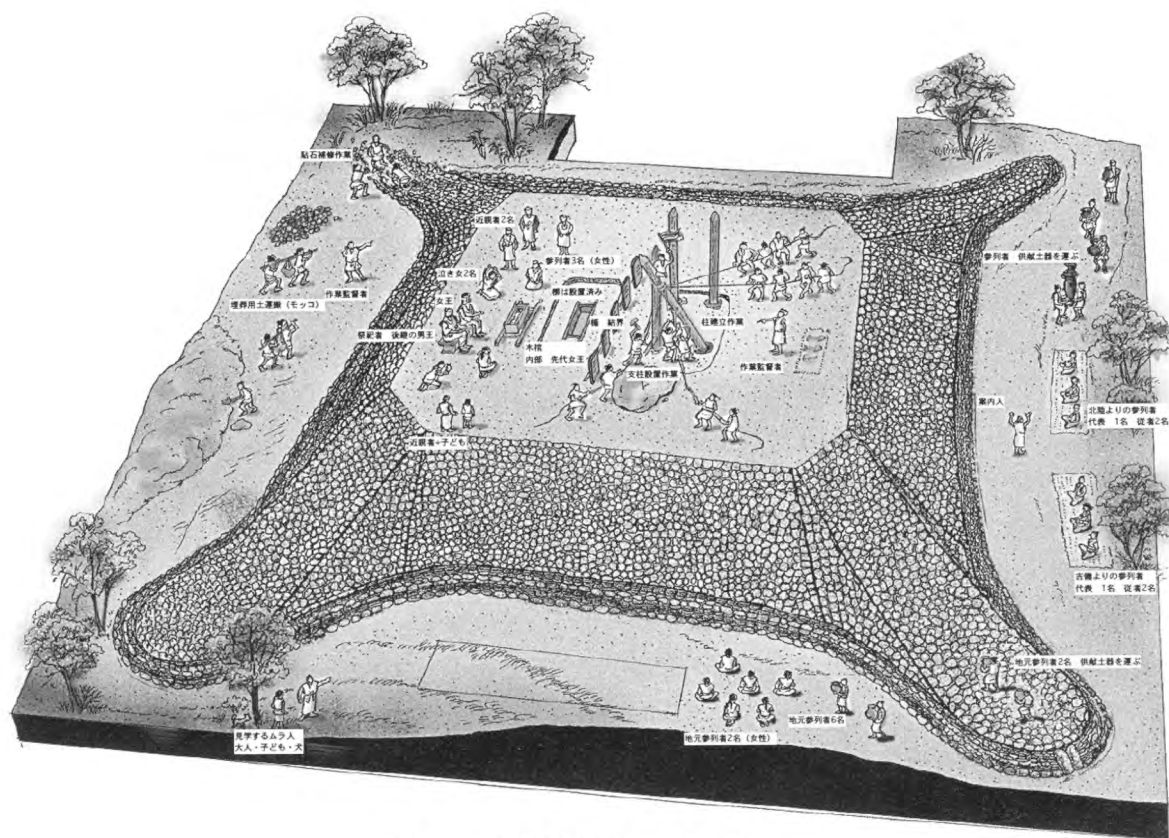


図9 展示設計段階のイメージ図

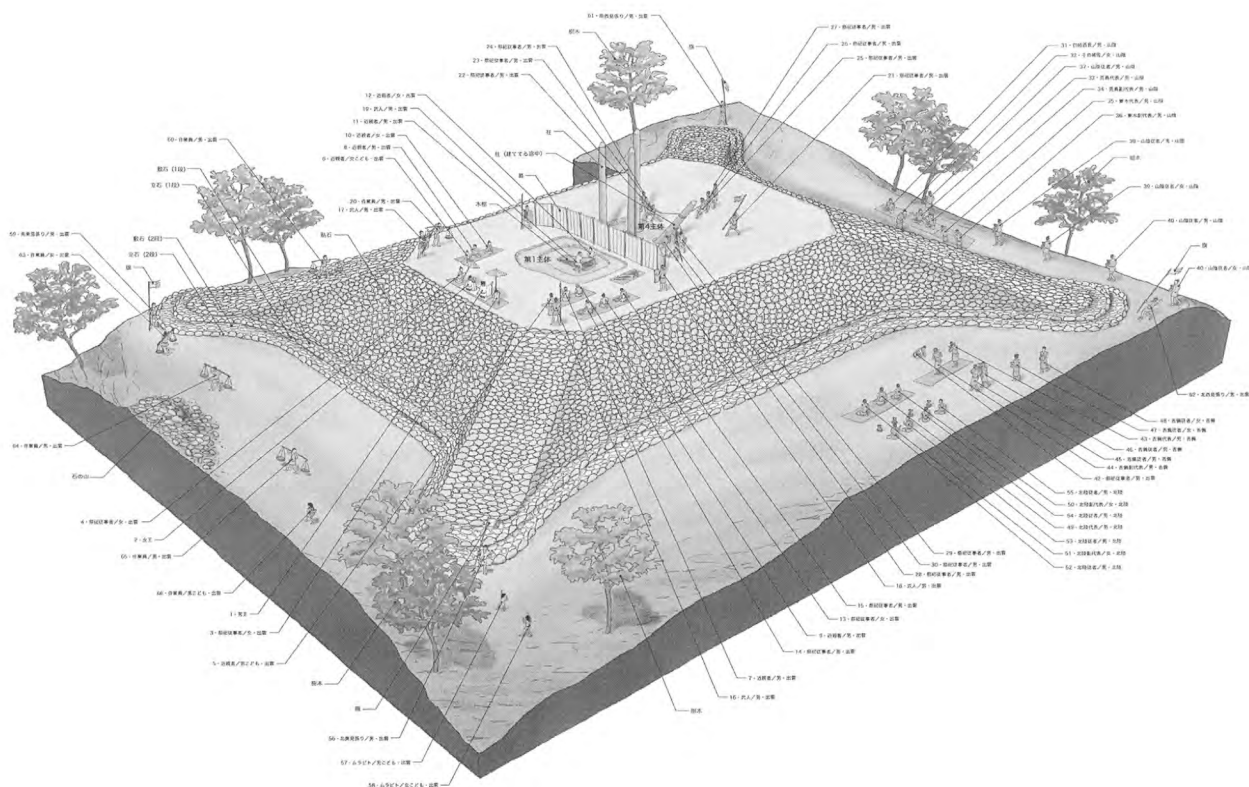


図10 施工図検討段階のイメージ図

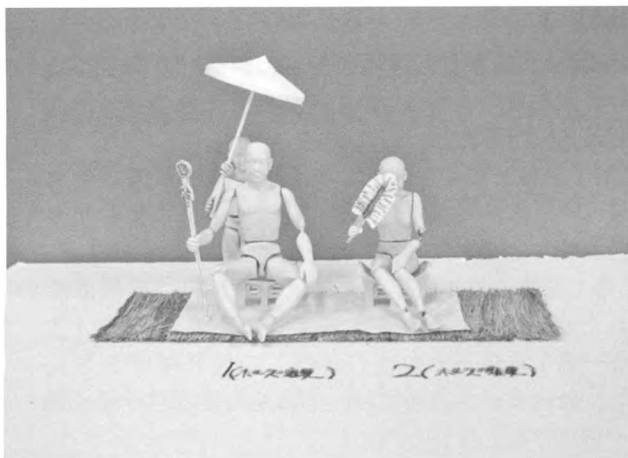


図11 工場製作状況



図12 パーツ搬入状況



図13 模型設置状況

【註】

¹ 土壙の規模は掘り込み面からの数値で計測されたものである。1主体・第4主体とも土壙の掘り込み面は地山面である。

² 第1主体と第4主体土壙埋土上の盛土と同様の土層は墳頂部の大部分で広域に確認され、出土した土器資料は全てこの土層の上から発見された。

³ 第1主体と第4主体の土壙上の盛土以前に埋置された埋葬は他にも存在するようであるが、「第4主体→第1主体→その他の埋葬」の埋葬順序を想定し、設定シーン段階では、その他の埋葬に伴う土壙や棺は存在しないものとした。

⁴ 実際には地山面が傾斜しているため土壙埋土上の盛土高は第1主体で0.4m前後、第4主体で0.15m前後と差があるが、模型制作に当たっては地山掘り込み面レベル45.8m、土壙埋土上の盛土高0.2mと統一して復元した。

⁵ ここでは近畿地方以西を西日本として捉えた。

⁶ 例外として、東日本で愛知、長野に類例のある縄

文時代晩期の後頭部結髪土偶、西日本で京都府温江遺跡の人面付土器に後頭部髪結び表現がある。

⁷ 『魏志』倭人伝読み下し文は、石原道博編訳1985『[新訂]魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』岩波書店（初版1951）から引用した。以下、同じ。

⁸ 両遺跡出土品の人面表現に共通して見られる口周りのひげ状表現を鯨面の地域的特徴と仮定してこれをアレンジした。

⁹ 体のイレズミ表現についてはアイヌや沖縄諸島の民俗例に倣って施される位置を手の指・甲から肘を中心とした範囲とした。赤い化粧については古墳時代の人物埴輪を参考に施される場所を顔や首から胸を中心とした範囲とした。

¹⁰ 器財についての参考資料は多岐にわたるため、考古資料については参考とした資料の出土遺跡、絵画・文献史料についてはその名称のみを一覧に記すに留め、個々の参考文献については割愛させていただいた。

参考文献

出雲市文化財課編 2006『国指定史跡 西谷墳墓群』（遺跡パンフレット）

井筒雅風 1989『原色日本服飾史』光琳社出版

猪熊兼繁 1964『古代の服飾』至文堂

角田徳幸・山崎修編 2002『加茂岩倉遺跡』島根県教育委員会・加茂町教育委員会

小松市教育委員会編 1992『矢田野エジリ古墳発掘調査報告書』

坂本豊治ほか 2006『西谷墳墓群—平成14年～16年度発掘調査報告書』出雲市教育委員会

佐原 真 2003「5髪と衣」『魏志倭人伝の考古学』岩波書店、64～82頁

設楽博巳 1999「鯨面土偶から鯨面絵画へ」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集、国立歴史民俗博物館、185～201頁

武田佐知子 1984『『魏志』倭人伝の衣服について—「横幅」衣・「貫頭」衣の位相—』『女子美術大学紀要』14号、女子美術大学、42～68頁

角山幸洋 1981「織物」『三世紀の考古学』中巻、学生社、272頁

久田正弘 2006「北陸地方の絵画資料」『原始絵画の研究 論考編』、六一書房、165～192頁

深澤芳樹・佐古和枝 2009「弥生男性の髪形と衣服」『第9回弥生文化シンポジウム 妻木晩田の人々が愛した色—弥生時代の色彩世界—』鳥取県教育委員会、5～11頁

松本岩雄ほか 2003「宮山IV号墓の調査」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財センター、82～105頁

吉岡幸雄・深澤俊樹 2009「茜と藍、絳青縑の考古学」『國文學』第54巻第6号、学燈社、104～115頁

渡邊貞幸編 1992「西谷墳墓群の調査（I）」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学法文学部考古学研究室 II部

渡邊貞幸 1993「弥生墳丘墓における墓上の祭儀—西谷3号墓の調査から—」『島根考古学会誌』第10集、島根考古学会、153～160頁

渡邊貞幸 2003「四隅突出型墳丘墓の突出部」『新世紀の考古学 大塚初重先生喜寿記念論文集』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会、219～234頁

渡邊貞幸 2011『「よすみ」の終焉—古墳時代への転換—』出雲弥生の森博物館市民講座「四隅突出型墳丘墓の謎を解く」③、資料